

MfG_J_intro_Kina-saffron-Shu_brewery (Nitarou world)

目次

0. はじめに

五行思想と十二支、背景に守護する龍、自然の靈力

- (1) 五行思想と十二支
- (2) 背景に守護する龍
- (3) 薬師如来と龍
- (4) 十二神将と七福神
- (5) 自然、五大思想と庭園、離れの靈力、守護の力
- (6) その源流は
- (7) サフラン酒のポスターの二匹の龍

追記 薬師寺本尊の薬師如来の台座との関連は
仁太郎ワールドの二面性

1. 「仁太郎ワールド」の形成

シンボルの絵解き

仁太郎ワールドの「祈りの構造」の予想図

仁太郎ワールド図

2. 鏝絵蔵の東面、北面・南面に込めた想い、祈り

五大思想と陰陽五行思想、豊作をもたらす自然への畏敬

3. 祈りのシンボル、その他に散りばめられた印

4. 祈りと、仁太郎の生涯

(機那サフラン酒本舗の祈りの空間)

5. サフラン酒の庭園・離れの、もうひとつの解釈

補足

荒俣宏, "アラマタ美術誌", 新書館(2010) のサフラン酒関係箇所抜粋

猪目、擬宝珠入門

成金趣味という意見について

参考 平等院・本堂屋根降棟の龍頭瓦

0. はじめに

五行思想と十二支、背景に守護する龍、自然の靈力

機那サフラン酒本舗の饅絵蔵、庭園、離れを回ると、なにかあるな、と感じる方が多いと思います。本文は、その感覚に対する、ひとつの見方です。散策の楽しみが増えるならば、幸いです。

(1) 五行思想と十二支

下の表は、東西南北の四霊獣、五虫・最上位の四瑞獣の表です。饅絵蔵の東面のテーマは、この「重ね合わせ」と考えています。

五方	東	南	中央	西	北	} 五行思想のひとつ、 東西南北の四霊獣
五色	青	朱	黄	白	黒	
五獣	青龍	朱雀	(黄龍)	白虎	玄武	} 五行思想のひとつ、 五虫の最上位の四瑞獣
五虫	鱗	羽	裸	毛	介	
最上位	応竜	鳳凰	聖人	麒麟	靈亀	

サフラン酒の饅絵の配置が、五行思想と関係していることは明らかです。そして、饅絵が描かれている軒下、二階、一階を、五行と似た、もうひとつの思想である、インド由来の五大の天空、火風、地水と考えるとき、各饅絵の配置が、これしかない必然であると、気づかされるのです。

各々が東西南北の守護神であり、白虎が十二支の寅を兼ねるということで、「十二支と四霊獣」がポイントです。ちなみに十二支も、五行思想と関係していますが、饅絵のレイアウトとの関連は、まだ分かっていません。

麒麟は、五虫のメンバーと、地上の地水を玄武と分け合う動物を兼ねると考えると、全て、うまく説明ができるのです。

饅絵蔵の入口の冠木門には、七福神の二人です。七福神は、人の本質である最も尊い宝とされる「寿命・裕福・人望・清廉・愛敬・威光・大量」を神仏聖人に当てて崇敬されています。

「七福」は仁王経という経典の言葉の七難七福を語源とし、七つの難から逃れて七つの福を授かるもので、瑞祥の象徴として信仰されています。この順に「寿老人、大黒天、福祿寿、恵比寿、弁財天、毘沙門、布袋」という七人の神が対応すると云われていますので、この順番では、饅絵の大黒様、恵比寿様は、裕福と清廉に相当することになります。

商売の事務所入口に相応しいと感じています。

冠木門の右の窓の饅絵の「鶴」と「亀」は、長寿と繁栄・招福のシンボルですが、こちらは寿老人の代替かなと、思っています。

十二支の申がこれらの神様になったと考えると、饅絵蔵の内外の饅絵は、相互に関係し、孤立するものは一つもないことに気付くのです。

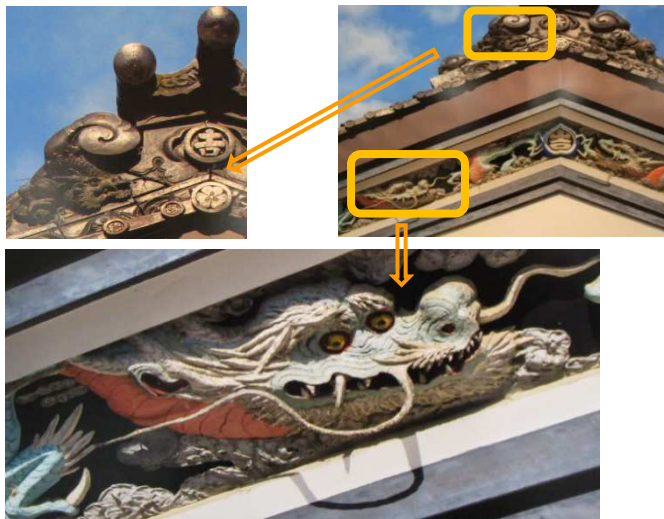
このように、『「成金趣味」という言葉で片付けるのはちょっと待って』、と考えざるを得ないのです。

(2) 背景に守護する龍

三十数年前、建築史が専門の藤森照信先生は、1985年の季刊「銀花」第64号冬号(文化出版局刊)にて、「サフラン酒の蔵 越後に咲いた土の華」を執筆しています。(p106-115)

このなかで、広大な屋敷の中の建物に棲む動物類を数えて、「竜三十八匹、鯉十尾、鳳凰五羽、・・・」などと述べておられます。

これを執筆されたのが三十数年前とは言え、本当に、こんなにいたのだろうか、と不安に思っていました。でも鰻絵蔵の外面だけで、図のように、鰻絵蔵、軒下の龍と鬼瓦の龍で、四頭も、いるのです。



東西南北の四霊獣の龍、五虫、最上位の四瑞獣の龍、十二支の辰、そして火防の守護神、仏教守護の龍と、全部を兼ねた龍です。

特に軒下の龍は、下から見ますとわかりにくいですが、ものすごくリアルです。ヒゲ二本のうち的一本は、画像に陰がありますので、長い立体です。空中になびいているヒゲは、結構太いようです。中の構造は不明ですが、九十年以上を経て錆が出ていないところを考えると、鉄などの金属ではなく、おそらくは、丈夫な植物の蔓を漆喰で囲ったようなものではないかと、想像しています。古来、漆喰の下地に、天然の植物繊維(すさ)が用いられたようですので、植物性の可能性は高いと思っています。

ヒゲの細部まで立体的な鰻絵は、伊豆の松崎にも見られず、きっと日本でも、ここだけではないかと思えます。さらに敦煌やベゼクリクの壁画や塑像にも見られないもので、もしかしたら、世界でもここだけの工夫かも知れません。鬼瓦の龍(*1)も立派で、いい顔をしています。そのほか庭にも離れにも、敷地内のあちこちに、龍が棲みついています。今は、展示していませんが、サフラン酒の門前に建っていた「大看板」にも、龍がいますし、不動明王も、動物に例えると龍だそうです。

(*1) 参考 平等院・本堂屋根降棟の龍頭瓦

(3) 薬師如来と龍

薬師如来の十二の大願とは、菩薩の頃の薬師如来が、将来如来になったときに実行すべき衆生救済のための十二の誓いのこと。

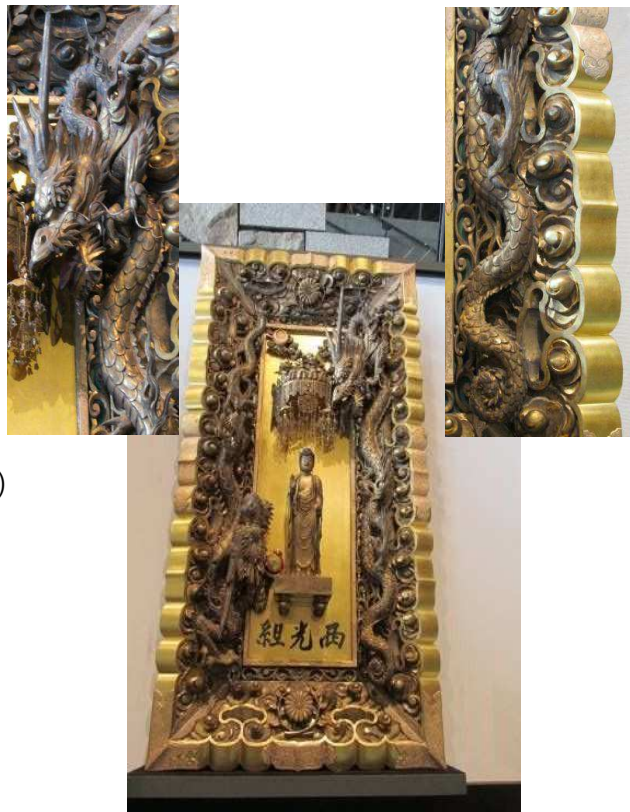
薬師如来の功德は、現世利益(げんせりやく)であって、人がこの世で生きるために必要なものを授けてくれ。その中でも多くの人々が苦しめられている病気。その病を除いてくれるという部分が強調され、「病氣平癒・延命長寿」という、薬師信仰の特徴を決定づけたものと考えられている。

また龍は、薬師如来の守護神でもある。

下図は、京都市烏丸高辻、因幡堂平等寺の昇り龍、降り龍像

2019年に龍谷ミュージアムで開催された「因幡堂平等寺」展でも紹介された。

右側に、
阿形の昇り龍が丸彫り
左側は
吽形の降り龍像



大乘仏教の教義の中の一つに『上求菩提(じょうぐぼだい) 下化衆生(げけしゅじょう)』と言うものがある。

菩提(ぼだい)とは菩薩(ぼさつ)になるための悟りのことで、
煩惱即菩提(ぼんのう そくぼだい) 如意宝珠(にょいほうじゆ)を
煩惱その物として説くこともある。

さまざまな解釈があるが、意味は、上求菩提(悟りを求め修行に励むこと) 昇り龍に相当、下化衆生(命あるもの全てに悟りを説くこと) 降り龍に相当するとされる。

阿弥陀仏の「回向」、無量寿経の往相還相に相当するものとも云える。

まさに龍は守護神であるとともに、人々に差し出される仏の救いの象徴でもあり、サフラン酒の龍の多くは、たんさんの大屋根の鬼瓦、衣装蔵東面の将来の龍を意図する鯉、そして鰻絵蔵の軒下の青龍、「対」になっているのである。昇り龍と降り龍の意味を、深く感じざるを得ないです。

(4) 十二神将と七福神

十二神将は全て鎧を身に付け、武器を手にしています。

また十二という数から、十二支と結び付き、それぞれ

方位と時刻を守る守護神とされているともいわれています。

それぞれの神将の頭に干支の像があったと思われませんが、殆ど消えています。

(参考)

十二神将	読み	時刻	方位	十二支	月
毘羯羅	びから	2 3時～ 1時	北	子	1 1
招杜羅	しゅうとら	1時～ 3時	北東微北	丑	1 2
真達羅	しんだら	3時～ 5時	北東微南	寅	1
摩虎羅	まこら	5時～ 7時	東	卯	2
波夷羅	はいら	7時～ 9時	南東微北	辰	3
因達羅	いんだら	9時～ 1 1時	南東微南	巳	4
珊底羅	さんちら	1 1時～ 1 3時	南	午	5
頰備羅	あにら	1 3時～ 1 5時	南西微南	未	6
安底羅	あんちら	1 5時～ 1 7時	南西微北	申	7
迷企羅	めきら	1 7時～ 1 9時	西	酉	8
伐折羅	ばさら	1 9時～ 2 1時	北西微南	戌	9
宮毘羅	くびら	2 1時～ 2 3時	北西微北	猪	1 0

七福神	七福・仁王経
寿老人	寿命
大黒天	裕福
福祿寿	人望
恵比寿	清廉
弁財天	愛敬
毘沙門	威光
布袋	大量

瑞祥の象徴

人の本質である最も尊い宝を、
神仏聖人に当てて崇敬

「鶴」と「亀」は、長寿と繁栄・招福
寿老人のシンボル

(5) 自然、五大思想と庭園、離れの霊力、守護の力

饅絵蔵の四霊獣の配置は、宇宙を地・水・火・風・空の五つの要素で構成しているとする考えると考える五大思想に則っていると見て取れます。

また、庭園、離れには、火山のエネルギーを象徴する溶岩の築山、パワーストーンにもなる稀石の巨石など、自然石が有する偉大な力、巨木や稀な木々が有する霊力、守護の力とともに、自然界のもつパワーが、いっぱいです。

(6) その源流は

以上のような見方で屋敷の建物全体が建造されていったというのは、間違いのないと思います。

明確には「なぜ龍、五行思想なのか」ということについては、まだ考えがなっていないのですが、もしかしたら、という「答えの候補」があります。

ポイントは、仁太郎さんが、初めに薬種商に奉公に行き。そして商売を薬用酒に絞ったところにあるのでは、そして鍵は「薬師如来」と、今は、思っています。列記します。

○ 薬師如来

○ 薬師如来の守護として「龍神」

これが、鬼瓦、鰻絵蔵・軒下の龍、さらに衣装蔵の鯉、全て一対の訳。昇り龍と降り龍を表わしたもので、昇り龍で、悟りを求めて修行する菩薩を、そして降り龍で、悟りを得た後は命あるもの全てにご利益を与える(悟りを説く)菩薩を意味しているのではないか。

○ その「龍神」のトップは、四神の黄龍と聖人であるとされ、そのシンボルとして「四霊獣」、「四瑞獣」を飾った。

○ 薬師如来の眷属として「十二神将」の言葉。

「薬師如来を信ずるものがあれば、それを守護して一切の苦難を取り除くとともに、諸々の願いを成就させよう」。
そのシンボルとして「十二支」を飾った。

このように、「薬」の仏様の薬師如来と、その守護神、眷属が考えのベースとして存在し、仁太郎ワールドが形成されたのでは、と思うのです。

すると、蔵の入口の、大黒天に恵比須様、鶴と亀の寿老人を、申の進化・転換した聖人を意味すると考える、『私の謎解き』が完成するように、思うのです。

庭園と離れについて、今まで、「巨石・銘石、巨木・銘木、巧みな設えによる招福、魔除け」という解釈をしてきたのですが、もうひとつの解釈として、禅宗寺院と茶室という考えも成り立つのではないかと、気づきました。

そうすると、このサフラン酒の鰻絵蔵、庭園と離れの、風変わりな荘厳は、陰陽五行説を中心とする儒教思想、茶室・庭園に具体化した仏教思想とみることも、不自然でないのです。これについては、5章の、もうひとつの解釈に、述べることにします。

(7) サフラン酒のポスターの二匹の龍

～ 二匹の龍が玉を争う

サフラン酒のポスターに双龍と宝珠があります。

てっきり、協力して法を守る姿と

思いましたが、・・・

明治24年の特許局への商標登録にも、この双龍が使われていますが、説明書きには「玉を争う図」とあり、守護神とは言っていません。

でも、登り龍と降り龍を意識していたと思います。



岡倉天心にとって「茶の本」は、現在を永遠とするための美の教典である。また、岡倉が最後に執筆したオペラ台本「白狐」は「茶の本」には、東洋と西洋を暗示する二匹の龍が玉を争う場面が描かれており、東洋と西洋が理解しあい、世界が調和することを願った岡倉の白鳥の歌である。(Wiki)



建仁寺の天井絵《双龍図》 玉を取り合う双竜

龍は、修行僧に仏法の教えの雨を降らせると考えられ、仏法を守護する存在として禅宗寺院の法堂の天井にしばしば描かれた。

通常雲龍図は、宇宙を表す円相の中に仏法の神格である龍が一匹だけ描かれる建仁寺の双龍図は、二匹の龍が天井一杯に絡み合う躍動的な構図が始めて採用された。

二匹の龍が争うのではなく、共に協力して法を守る姿が描かれている。

大きさは、縦14.4m、横15.7m(畳108枚分)

麻紙とよばれる丈夫な和紙に最上の墨房といわれる《程君房(ていくんぼう)》の墨を使用。

は2002年に建仁寺開創八百年を記念して描かれた。

小泉淳作画伯は2002年に鎌倉・建長寺の天井画「雲龍図」を完成させて

おり、そのすぐ後に、依頼を受けて制作に着手……しようと思ったら

その大きさゆえ制作する場所が見つからず、鎌倉を拠点に活動していた

小泉さんが最終的に選んだのはなんと北海道帯広市郊外の廃校小学校の体育館。構想から一年十ヶ月の歳月をかけて完成。

追記 薬師寺本尊の薬師如来の台座との関連は

図(1)は、奈良・薬師寺の本堂に安置されている薬師三尊像です。この後ろに、十二支に呼応する十二神将が並んでいます。そして本尊の薬師如来の台座に、多くの守護神、または、その象徴が配置されているのです。それらは、まさに、不思議なほど、鰻絵蔵の装飾と一致しています。以下の、鰻絵の画題と薬師三尊台座の文様との類似は、春日の仮説です。でも、あまりに符合しており、偶然とは思えません。



北面：玄武

南面：朱雀



東面：青龍



西面：白虎



双龍

葡萄蔓の唐草文様

四神・四霊

十二支

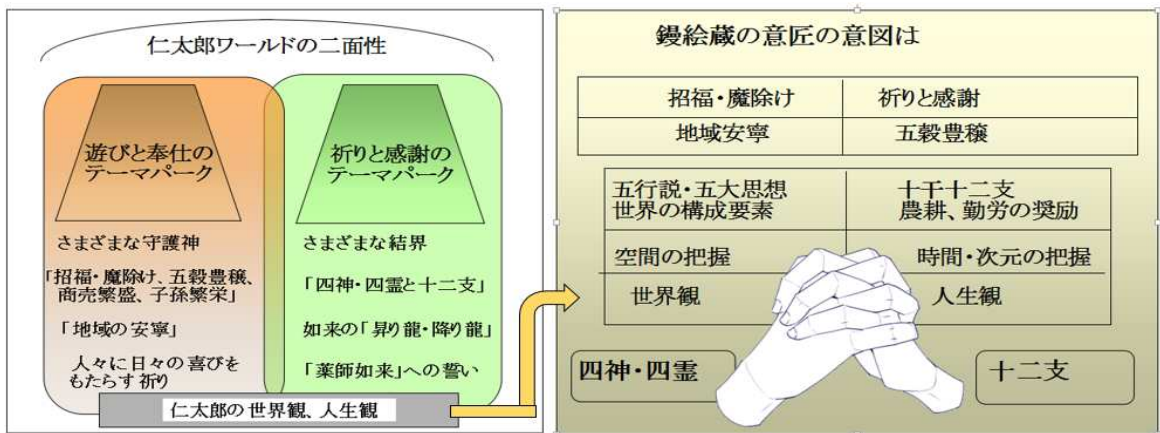
これらはすべて薬師如来の属性

これらに加えて、日本の招福のシンボル

鰻絵蔵、そのほかの建物、庭園を含む、機那サフラン酒本舗の全ての作品は、薬師如来のあらゆるアトリビュート(属性)の具体化であり、仁太郎と周囲の人々全ての守護神の具体化なのです。

追記 仁太郎ワームの二面性

機那サフラン酒については、1990年代、観光ブームの時に出版された全国の蔵や饅絵の紹介本の中で、大半が「建物道楽、成金」という言葉で片付けられ、饅による造形技術の凄さへの言及も知る限り皆無でした。最近になり、創業者も大変な教養人だったとの評価が出始め、嬉しい限りですが、まだまだ以前の低評価から抜け切れていません。私は、この両極端とも云うべきゲストの印象の原因を考えてきまして、ようやく、仁太郎さんが創造した世界、仁太郎ワールドは、元来二面性をもつテーマパークともいうべきもので、細かく見ませんと、誤解をしてしまいがちと、気づきました。まさに「美は細部に宿る」です。現在、抱いています『仁太郎ワールド』は言葉で説明すると長くなりますが、イメージにしますと下図の通りです。



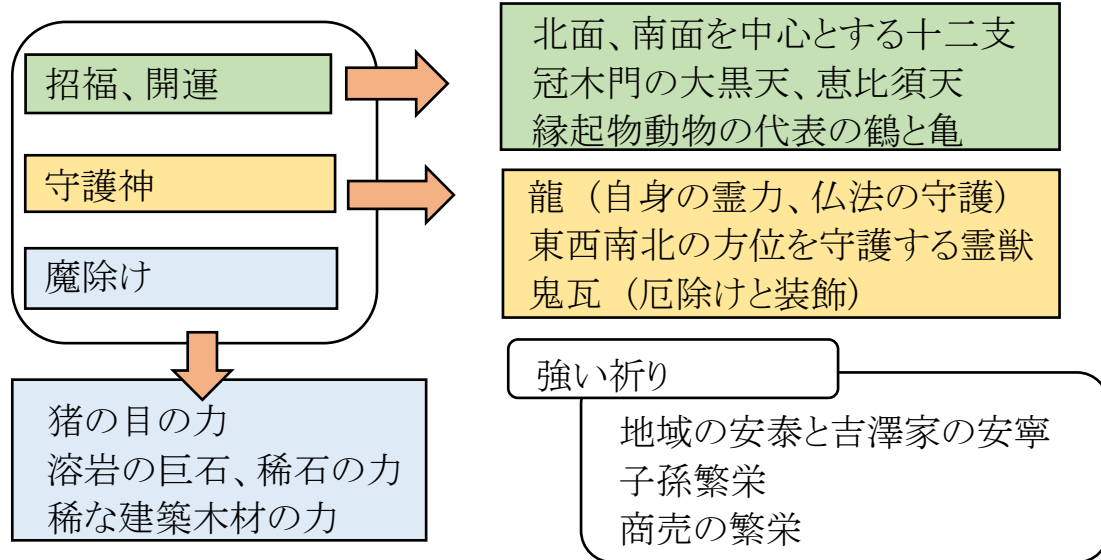
1. 「仁太郎ワールド」の形成

(C) Kasuga 20201103改訂

シンボルの絵解き

敷地内を、ありとあらゆる招福と魔除けのシンボルで埋め尽くす・・・

敷地内を、招福、守護神、魔除けのありとあらゆるシンボルで埋め尽くし、地域の安泰と吉澤家の安寧、子孫繁栄、商売の繁栄・永続を祈った。それが「仁太郎ワールド」。



シンボルの一例

龍のもつ力を信じた仁太郎は、鯉、石や木の自然力、不動明王にも、相通じる力、招福・守護・魔除けの力を感じ、これらのシンボルで埋め尽くした。
 (1) 鯉は、登竜門ということばがあるように、龍になる。清い流れの川にも、よどんだ池にも棲むことから、いかなる艱難辛苦にも耐える強く勇気のある魚のシンボルとされる。

その由来は、後漢書にある「黄河の登竜の伝説」として知られる。

(2) 溶岩の築山、パワーストーンにもなる稀石の巨石など、自然石が有する偉大な力、巨木や稀な木々が有する霊力、守護の力とともに、自然界のもつパワーの溢れる庭園、建築物になっている。

(3) 庭園の池の奥、そして鏝絵蔵のコレクション室に、除災招福、悪魔退散の力をもつ不動明王がある。龍神は、不動明王の化身とされる。

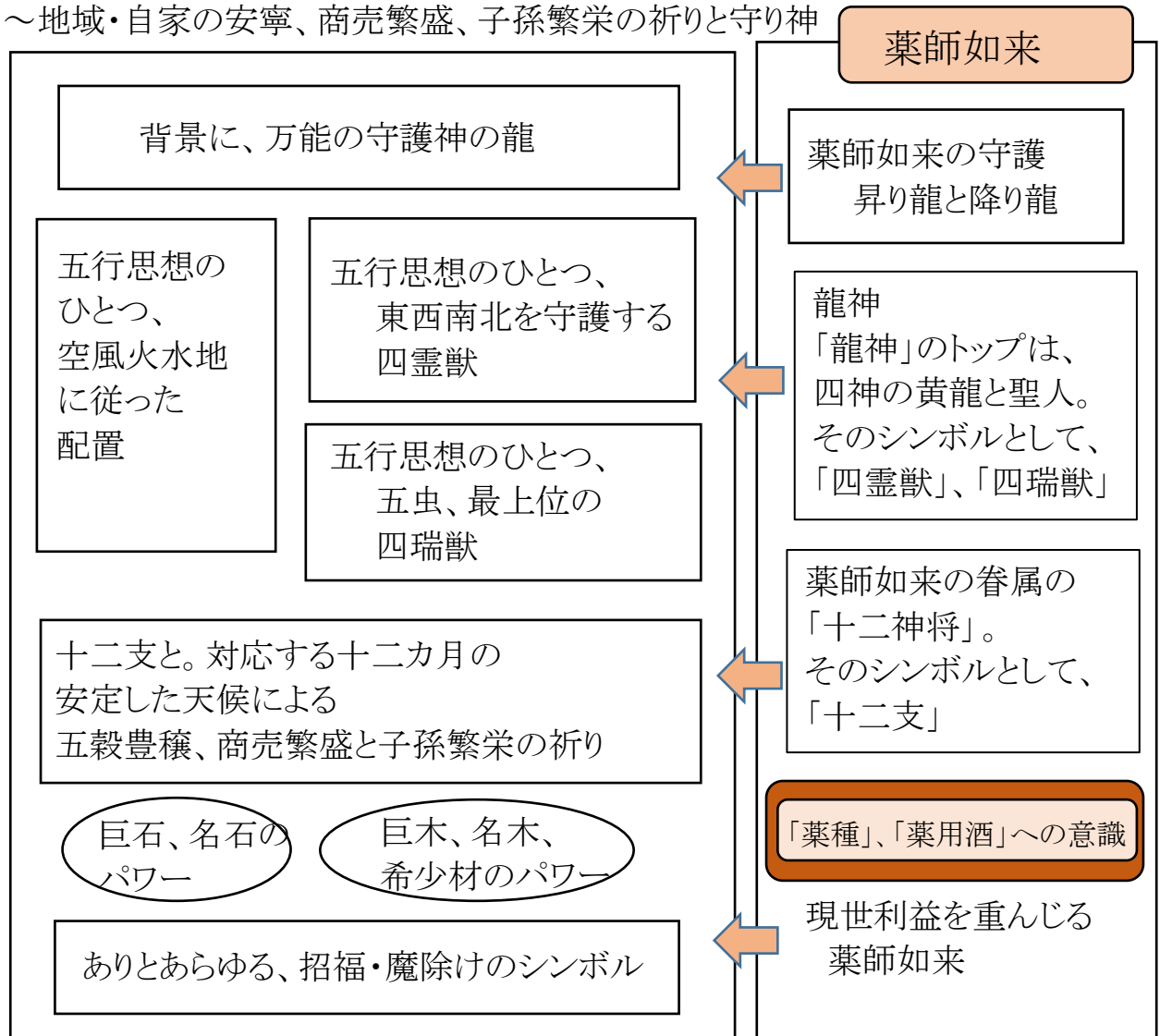
Facility	龍	鯉	巨石、稀希材木	不動明王
鏝絵蔵の軒下	○			
鏝絵蔵の東面の鬼瓦	○			
衣装蔵	○	○		
庭園	○	(○)	○	○
接待用別邸 (離れ)	○		○	
鏝絵蔵コレクション室	○	○		○

龍の霊力が守ってくれる

仁太郎ワールドの「祈りの構造」の予想図

機那サフラン酒本舗の敷地にあふれる「祈り」の構造

～地域・自家の安寧、商売繁盛、子孫繁栄の祈りと守り神



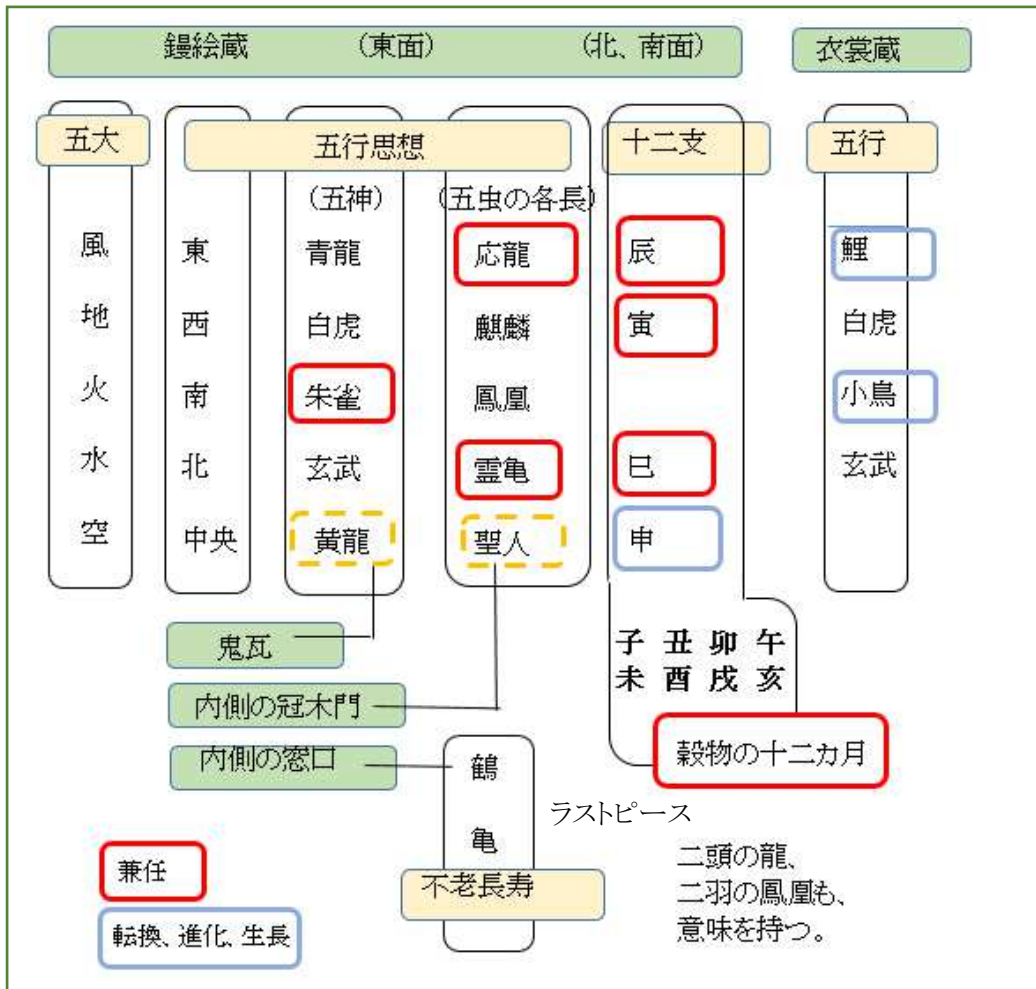
東面は、東の青龍、西の白虎、南の朱雀、北の玄武いう、方角の守護神としての四霊獣を表わすと見ています。また、古代中国では、生き物を鱗、毛、羽、甲の四類に分類し、四つのそれぞれを統括する長(王)の、応龍・麒麟・鳳凰・亀という四霊獣のグループもあります。このように龍は、東西南北の四霊獣の龍、五虫の最上位の四瑞獣の龍、十二支の辰、そして火防の守護神、仏教守護の龍と、全部を兼ねた中心なのです。

北面、南面を中心とし、その進化・転換によるものを含めた十二支も揃い、五穀豊穰、商売繁盛と子孫繁栄の祈りと、それを見る人へのご利益です。そして、これらを、若いころの薬種商への奉公、そして薬用酒への進出と奮闘で、ずっと心に秘め続けた「薬種」、「薬師如来」の具体化と捉えることも、無理ではないかも知れません。

1. 鏝絵蔵、衣装蔵の祈りの空間、兼任と転換を駆使した絶妙な配置

創業当初は龍の力に将来の発展を託し、商売が軌道に乗った時期には、五行思想と十二支の動物、植物を、五大思想で絶妙なレイアウトで配した。

地域安寧、五穀豊穰、商売繁盛・事業繁栄、子孫繁栄の祈りの空間である。



2. 離れ、庭園の祈りの空間

家業が成功した建設当時、この繁栄を今後も末永く続け、守っていききたいという気持ちが、離れと庭園を多くの魔除けと招福のシンボルで埋め尽くしたと、見てとれる。

離れには、巨木、銘木や希少材のもつパワーと細工の巧妙さに、魔除けと招福を託した。

庭園には、巨石、銘石のもつパワーに、魔除けと招福を託した。とりわけ浅間山の溶岩の持つ火山の膨大なエネルギーに、祈りを込めたのでは、と見てとれる。

離れのガラス窓の猪の目、庭園の不動明王も、その気持ちの表現であり、離れ、庭園のそこかしこに、長年の龍の加護への感謝と祈りも忘れてはいない。

それが、そのままお招きする賓客にも、真心をもって差し向けられている。

このように、「仁太郎ワールド」とは、機那サフラン酒本舗創業者の吉沢仁太郎の想いそのものなのです。饅絵蔵、衣装蔵、主屋、庭園、離れ、コレクションから 見えて来るものは、篤い信仰心による、地域、そして自家の安寧への「想い、祈り」、そして神仏を喜ばせ福を招く「祈願」では、ないでしょうか

近隣の神社への寄進、新たな神社の勧請

数々の、地域・自家の安寧、商売繁盛、子孫繁栄の祈りと守り神

2. 饅絵蔵の東面、北面・南面に込めた想い、祈り

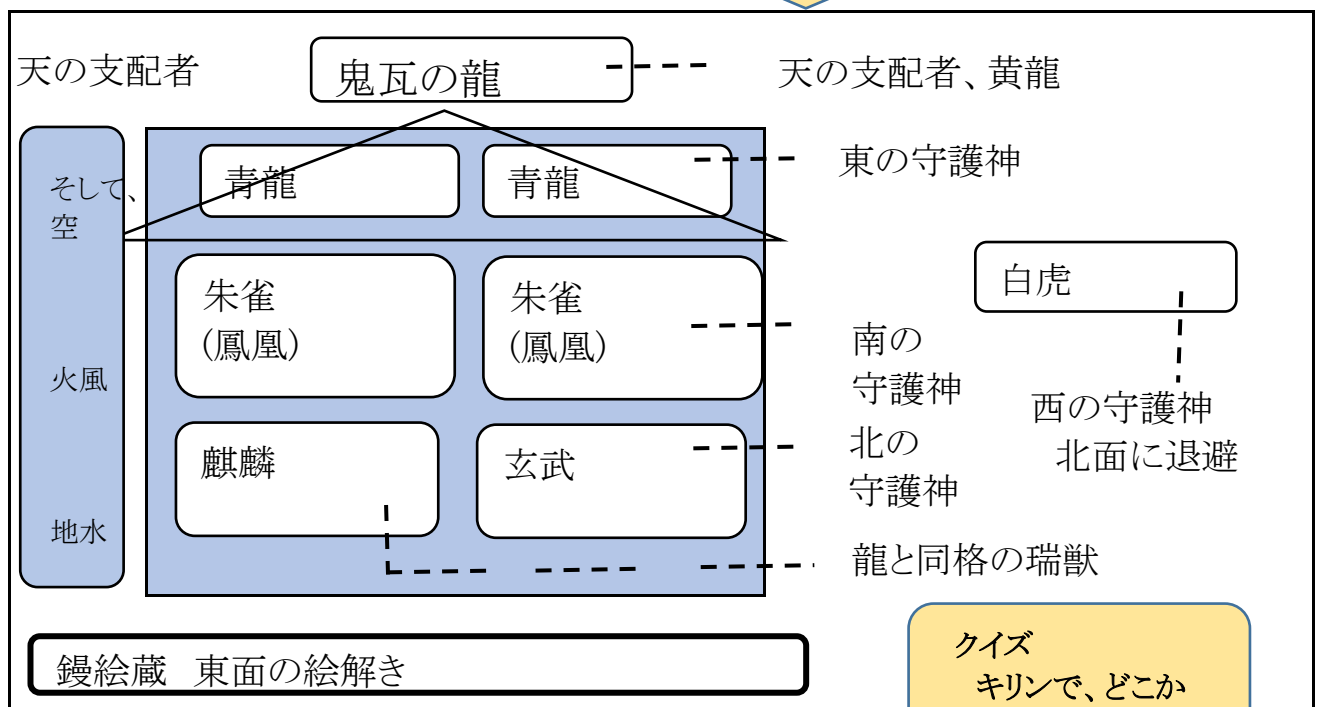
五大思想と陰陽五行思想、豊作をもたらす自然への畏敬

サブテーマ1 東面
方位守護神の霊獣、瑞獣

サブテーマ3 五大の階層
地水火風空

サブテーマ2 北面・南面
農作物各季節の安泰と家業繁栄を
祈る十二支（東面、蔵の内部の
饅絵と合せ、十二月、動物を完備）

クイズ
へビは、サルは
どこに？



3. 祈りのシンボル、その他に散りばめられた印

饅絵蔵の内部の饅絵 ～ 冠木門の両扉の恵比須天と大黒天、右側に鶴と亀

衣裳蔵の饅絵 ～ 鯉・鳥・白虎・玄武

離れ ～ ガラス窓の全てに猪の目、屋根に鯪子鯪(脱落)

庭園 ～ 巨岩 (築山の溶岩、銘石)、随所に石灯籠、お不動様

コレクションのお不動様、鯉仙人の鯉、七福神 などなど

大看板 ～ 大きな龍

4. 祈りと、仁太郎の生涯 20201023改訂 春日

(吉澤仁太郎の世界、「仁太郎ワールド」の もうひとつの解釈)

みなさん、長岡市撰田屋にあります、機那サフラン酒本舗の饅絵の豪華さを、お聞きになった方もおられると思います。もしかしたら、薬用酒の製造販売で財をなした金持ちのゴテゴテ趣味、なんていうコメントを見かけた方も、おられるのではないのでしょうか。でも、単なる成金趣味とみると、そこに潜む、見落としてしまうものがあるかも知れません。今日は、そんなお話をします。

見学に来られるゲストは、だいたい、門の入り口の正面の饅絵蔵の饅絵、そして主屋を見物の後、案内のスタッフについて、奥に広がる賓客接待専用で作られた庭園、離れを見学されます。もちろん、この順で回っても、その素晴らしさを充分ご覧いただけるのですが、それだけですと、創業者の吉澤仁太郎の、家運隆昌を祈った想いに気づかれないように思います。40年近くに渡る施設建設の順番に着目すると、仁太郎の「別の」想いが、みえてくる気がするのです。

その1 主屋建造、増築当時 [明治27年(1894)、大正2年(1913)] (写真A)

鬼瓦に据えた龍に託した「守護神、火防」が中心で、その龍に招福の霊力も期待しました。

その2 最初の饅絵の蔵、衣装蔵建造当時 [大正5年(1916)]

鬼瓦に龍、そして、八枚の饅絵には、東面に鯉の滝登りと鳥、北面に玄武と白虎を配しました。饅絵蔵のような、四霊獣(青龍、白虎、朱雀、玄武)をもって東西南北の守護神とする考え方が、既に、しっかりと現れています。はじめて作った饅絵の一部に、あえて、将来の龍を予見させる滝を昇る鯉、そして明日の鳳凰を思わせる小鳥を配したところに、まだ五十代、もっと商売を伸ばすんだ、いま見ている、という気持ちが見え隠れします。そして次の蔵の建造も、饅絵の図柄も、このとき既に決めていた、飛躍への覚悟としか、思えないのです。

その3 饅絵蔵建造当時、大正5年起工から大正15年(1926)竣工の間 (写真B、C)

撰田屋で商いを始めてから二十年あまり、順調に家業が延びてきたことへの感謝と、更なる繁栄を祈念する気持ちから、五行思想にもとづく東西南北の四霊獣、めでたい四瑞獣(応龍、麒麟、鳳凰、霊亀)、そして穀物の十二カ月で五穀豊穡を暗示する十二支を配そうとしたと考えられます。すなわち、龍とその他のメンバーで、地域安寧、五穀豊穡、商売繁盛、子孫繁栄を念じ、さらに土蔵の入口部分では、商売繁盛と人間の徳の二つを暗示する聖人、更にめでたい鶴亀で招福と長寿を願ったのです。まさに守護神、招福、魔除けを、蔵の四方と内外を飾る饅絵に込めたと云えると思います。そして、それらは、見ている人々にも、注がれるのです。

その4 離れ、庭園建造 [昭和6年(1931)] 写真D、E、F(庭園、離れの龍、猪の目)

家業が繁栄してきました。今後も末永く続き、守っていききたいという祈りからと思いますが、庭園では巨石、銘石のもつパワー、とりわけ浅間山の溶岩の持つ火山の膨大なエネルギーに、そして離れでは巨木、銘木のもつパワーと細工の巧妙さに、それぞれ魔除けと招福を託したのでは、と見てとれます。離れのガラス窓の猪の目、庭園の不動明王をはじめ、随所に魔除けや龍に絡めた祈りと感謝が溢れ、それらは全て、まず最初に、お客様に振り向けられています。

このように、サフラン酒の敷地は、地域安寧、商売繁盛、子孫繁栄の祈りに満ちた空間なのです。また、饅絵蔵の内外の饅絵、軒下の1枚を含め計18枚の配置も、絶妙なんです。地・水・火・風・空の五大思想に、四霊獣、四瑞獣の五行思想とを併せて考えると、東面の饅絵の配置は、この配置しかないという、実に見事な、絶妙の対応・配置であることに、気づかされます。会心の配置に、「どうらね、わかったかね。」と云わんばかりの仁太郎さんの笑顔が、見えてくるような気がするのですが、如何でしょうか。



写真 A



写真 B



写真 C



写真 D



写真 E



写真 F



補足 龍について

仁太郎は、龍に特別の想いを持っていたようで、かつて機那サフラン酒の屋敷には、龍が38匹も、いたそうです。もともと火防の意味もあるのですが、その龍が多くいるわけには、魚沼の西福寺開山堂の石川雲蝶作による「道元禅師猛虎調伏の図」を繰り返し見たという仁太郎や後に饅絵を製作する伊吉の体験が、もとになっているという見方もあります。

構図を決めて名人・雲蝶に彫刻絵画の装飾を施させたのが、幕末当時の西福寺方丈、大龍和尚です。和尚は、前住職の志、この雪深く貧しい農村地域の人々の心の拠り所となるお堂を建てたいという願いを引き継ぎ、お釈迦様や道元様の教えこそが人々の心を豊かで幸せに導いて下さると信じ、この開山堂にも道元様の世界を再現したいと考えて、雲蝶さんに託したといえます。

仁太郎の饅絵の図も、雪深く貧しい農村地域の人々の心の拠り所として、「暗く重たい冬への反発」ではと、思いやりの心で表現される研究者もおられます(*1)。屋敷の周囲に住む、日々の厳しい暮らしに生きる人々への、仁太郎の、心からの励ましです。私も、単なる火防やお守りのみならず、仏法の守護、そして人々の心を豊かで幸せにという、強い祈りが、鬼瓦をはじめ、龍、あるいは龍を暗示させる図像を、屋敷内のあちこちに配置したのでは、という側に立ちたいと思います。

(*1) 建築史がご専門の、藤森照信先生、「建築探偵神出鬼没」,朝日新聞社(1990)

補足 申について

『ここには、サルはおりません。縁起の悪い「去る」に通じるからです。』という人もおりますが、私は、サルは、いるという側に立ちたいと思います。

十二支のものは、穀物の十二カ月の種蒔きから生長、開花、結実、収穫を意味するとされ、1つ欠けても、毎年続く五穀豊穡のサイクルができません。ですから、この鯉絵蔵の十二支も、全て揃っている筈と思うのです。まして、サフラン酒にご来店され、饅絵をご覧になるお客様の中には申年生まれの方もおられるでしょう。お客様を大事に思う仁太郎さんが、そのような、お客様をションボリさせることを、する訳がないのです。では、辰、巳、そして申は、どこにいるのでしょうか。でも仁太郎さんは、これについて、何も残していません。仁太郎さんの謎かけでは、と思っています。もしかしたら、私は、有力な答えを見つけたかも知れません。

既に訪問された方も、そんな見方で、もう一度ご覧になっていただき、招福、魔除けの祈りを味わっていただきたいのです。

5. サフラン酒の庭園・離れの、もうひとつの解釈

庭園と離れについて、今まで、「巨石・銘石、巨木・銘木、巧みな設えによる招福、魔除け」という解釈をしてきたのですが、もうひとつの解釈として、禅宗寺院と茶室、そこに至る露地という考えも成り立つのではないかと、気づきました。

構成要素を列記しますと、次のようになり、その意図があったと考えざるを得ません。

(1) 主屋

おびただしい龍 仏法の守護神 (※ 補足参照)

火灯窓 (華頭窓、架灯窓) この窓で禅宗寺院を想起させる設えと考えられる

(2) 庭園

露地 多くの踏み石 ~踏み石にしては大きい、庭の大きさに合わせたと考え、合点がいく。

多くの灯籠 夜の茶会のため、足元やつくばいを照らす。

溶岩の築山 山中の自然のなかにいるような、雰囲気を醸し出す。

特に、夕刻から夜、そして早朝までの間は、深山幽谷。

赤玉石と翡翠 ともに魔除けの意味を持つ。赤玉石は庭以外にも随所に。

不動明王 国家安穩、万民豊樂の誓願を意味し、龍の化身とされる。

(3) 玄関先

つくばい 身体を清める水手洗(みたらし) である。弥彦神社の御手洗川も、

連子窓 門の柵が連子である。 神様の自然のつくばい。

雲形に似せた彫り物 寺で時を知らせに打ち鳴らす、青銅や鉄製のもの。

(4) 一階

廊下の天井 桐でふく

一階の各部屋の書や絵画 床の間に飾られた掛け軸を意図。

龍の屏風 法堂の天井の龍を思わせる、いいお顔。

石禅の書 新井石禅師は、長岡にも縁のある、曹洞宗の高僧。

(5) 二階

最初の部屋は広茶室風の、対面の間。

網代天井 茶室風の部屋に見立てた。

床窓(とこまど) 床の間の横壁の組子障子で、ガラスは外窓を意図。

格天井 折上格天井であるが、格天井も茶室に用いられる。

二階の大広間 主客室であるが、庭園もみえる方丈をも意識している。

二階の廊下

手摺りの雲のたなびき 宝珠を得ようとする登り龍と下り龍

二階廊下の宝珠 如意宝珠

※ 補足 仏法の守護神

大乘仏教で権威ある教典のひとつとされる法華経の序品に、「八大龍王」というのが出てくるそうです。

天竜八部衆に所属する竜族の八体の竜王(竜神)のことで、仏法を守護するとされていますが、日本では“祈雨・止雨の神”ともされています。

一方で、龍神は洪水を起こす悪ともされていますが、坐禅をする僧侶の不可思議な力により龍神が仏教に帰依したという話から、禅と龍神信仰という民衆信仰が結びついたという説もあります。

0. はじめに にも書きましたが、龍は菩薩のようなものです。

大乘仏教の教義の一つに

『上求菩提(じょうぐぼだい) 下化衆生(げけしゅじょう)』と言うものがあり、さまざまな解釈がありますが、おおよその意味は、上求菩提(悟りを求め修行に励むこと) は昇り龍に相当し、下化衆生(命あるもの全てに悟りを説くこと) は降り龍に相当するとされています。

阿弥陀仏の「回向」、無量寿経の「往相還相」に当たるものとも云えます。「往相還相」も、『上求菩提下化衆生』という民衆の救済の具体化であり、仏法の守護神、さらに人々の幸を祈る守護神としての龍のはたらきが、得心できます。

この龍への思いこそが、吉沢仁太郎ワールドの原点かも知れません。そう考えると、このサフラン酒の饅絵蔵、庭園と離れの、ちょっと風変わりな荘厳も、陰陽五行説を中心とする儒教思想、茶室・庭園に具体化した大乘仏教の世界のひとつと捉える、仁太郎さん独自の解釈とみても、不自然ではないのです。

サフラン酒施設のほぼ全体の建造を指揮した初代仁太郎は、たまたま庭仕事をしたときの傷がもとで急死しましたが、もう少し長く生きたら、次は何を形にしたか、教えてほしかったと思います。

荒俣宏, "アラマタ美術誌", 新書館(2010)

機那サフラン酒の饅絵について記述している箇所

p91 真打ともいうべき超大作をご紹介します。

新潟県長岡市撰田屋町にいまも存在する機那サフラン酒本舗という酒屋さんの蔵です。ここの装飾が饅絵になっています。ものすごいでしょ？

p93 サフラン酒本舗の壁に取り付けられた饅絵は、十二支と四方位の神獣を描いたものでした。十二支は、旧暦の基礎となる陰陽五行説に関係があり、日や月や年の吉凶を占う目印でした。それを装飾に用いるのは、幸福と繁栄をもたらそうとする「呪術」です。高松塚古墳の壁画に四神図が描かれたことと、まったく同じ意味をもちます。

p93-94 さて、十二支というのは十二ヶ月のシンボルであると同時に、十二刻、つまり一日の時間のシンボルでもあります。十二支は要するに一年のサイクルをあらわすわけです。それが全部描いてあるということは、一年が無事におわるようにという祈りが込められていると考えられます。サフラン酒の正面には、きれいな扉に大黒様と恵比須様が描かれています。小判を持っていますから、家内安全・家業繁栄を意味していることがわかります。つまり一家が幸せになるようにというメッセージが込められている。入口にはいったところに、麒麟、龍、鳳凰、神亀など、この世には存在しない架空の動物たちが描かれています。風水による都市の方位防衛仕法を実践する、中国由来の神獣が四体とも描かれているのです。この土地が守られ、季節がちゃんと巡行しなければ、いい酒ができないからです。饅絵は、おおむね、このような「願い」や「護符」をモチーフとする装飾であります。

p94 節のタイトル

機那サフラン酒本舗の饅絵は異国の装飾も連想させる

ヨーロッパのフレスコ画にあたるのが、日本では饅絵。。

サフラン酒本舗の蔵が、「うわべを飾るアート」の本質を教えてくれる・・・

p121 鯉の滝登り（島根県大田市の饅絵）に関して

立身出世して王権を握ったり、あるいは願いが叶ったりするもののシンボルでありました。

そのほか、 荒俣宏, "黄金伝説"集英社文庫(1994)

猪目、擬宝珠入門

(1) 猪目

離れの窓ガラスの全ての四隅に、猪目がしつらえられています。

猪目は、日本古来から使われている図柄です。その名の通り、猪(いのしし)の目に由来して、魔除けや福を招く護符の意味合いがあり、伝統的な日本建築や、刀の鍔、社寺の鈴に必ずと言っていいほど使われています。悪魔、悪霊に対する魔除けの意味を持ち、幸運をもたらすとされています。その起源を縄文土器のなかに、見ることができます。



(2) 擬宝珠 (ぎぼうし)

離れの二階廊下の手すりの両側に、擬宝珠がしつらえられています。これも、龍と関わりをもつ、お守りです。

擬宝珠は、龍神の頭の中から出てきたという珠]という説もあるようです。

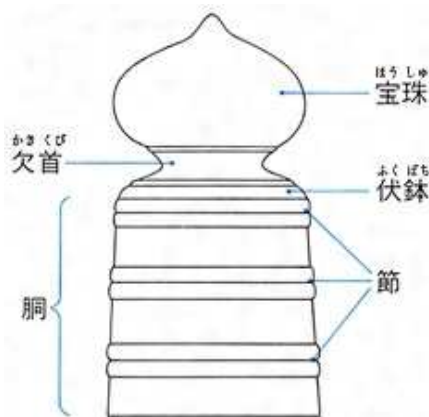
伝統的な建築物の装飾で橋や神社、寺院の階段、廻縁の高欄(手すり、欄干)の柱の上に設けられている飾りである。ネギの花に似ていることから「葱台(そうだい)」とも呼ばれる。

起源は諸説あり、一つは仏教における宝珠から来ているとするものである。宝珠は釈迦の骨壺(舍利壺)の形とも、龍神の頭の中から出てきたという珠のこととも言われ、

地蔵菩薩などの仏像が手のひらに乗せているものである。

この宝珠を模した形から模擬の宝珠という意味で擬宝珠とつけられた というもの。

紛らわしいものとしては五重塔、五輪塔などの仏塔の先端に飾られるもので、これは擬宝珠ではなく宝珠である



「成金趣味」という意見について

機那サフラン酒本舗の饅絵蔵を見られたお客様の中には、成金趣味だな、と云い捨ててお帰りになる方も、おられます。

他のお客様へのご説明の途中のために「ちょっと待って」、と声をかけることもかなわず、そのままお見送りすることも、少なくありません。

長岡郷土史研究会・第47号(2010)の“河上伊吉・機那サフラン酒蔵・饅絵の謎とその推理”において、執筆者の小林芳郎氏は、「その(饅絵)目的は一つには施主の財力の自己顕示であり、最大の目的は家内安全・商売繁盛・招福の願いからである。従って作品も瑞獣・瑞花・招福の作品が多い。」と記述されています。

著者が言及されているように、多少は「財力の自己顕示」があったかも知れませんが、最大の目的は、家内安全・商売繁盛・招福にあると思っています。

しかし果たして、成金趣味の一言で片づけていいものでしょうか。吉澤仁太郎の神仏への信仰心が並々ならぬものであり、近隣の神社の勧請や寄進、菩提寺の墓地などを知ると、それは絶対に違ふと思わざるを得ないのです。本文は、その解答のひとつの試みです。

饅絵の配置を見ると、訪れる人皆の目にふれる外側は、五穀豊穰と招福・地域の安寧への祈り、そして、普段は関係者しか立ち入らない内側は、商売繁盛と健康長寿・一族安泰の祈りであり、その配置が「祈りの役割分担」をしているように思えるのです。荒俣宏先生は、“アラマタ美術誌”,新書館(2010)の中で、機那サフラン酒の饅絵について記述されています。資料の最後に、荒俣先生の説明を抜粋しましたが、十二支を含め、さもありませんと思えます。

単に「成金趣味」というものではなく、深い思考による選定、配置を読み解くべきではないか、と考える私は、仁太郎さんを買いかぶっているのでしょうか。

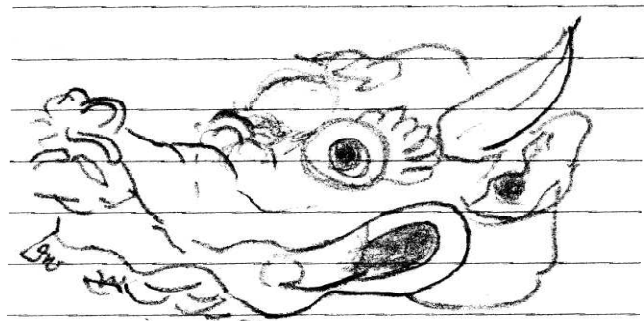
平等院・本堂屋根降棟の龍頭瓦

220422_春日

県立近代美術館の「平等院鳳凰堂と浄土院」展の内覧会に行ってきましたときの感想で、久しぶりに、古い仏さまを拝観しました。

展示会場で、気になったのが、本堂屋根の鳳凰から下に延びる降棟の先端にあるという、龍頭瓦です。改修工事で久しぶりに降ろされたとのこと。

大きさは横60センチほどの大きなもので、会場でラフスケッチをしてきました。



ネットで探したら、似た姿勢の実物写真がありました。

展示品は、こんなに怖そうではなかったので、違うものかも知れません。



サフラン酒の鬼瓦の韻と、そっくりなのに、驚きました。ほかにも、いかにも鬼らしい鬼瓦も、展示されていました。